

文化・芸術



「桐生鳥瞰図」

2016年、和紙・墨

(作家蔵)

金原寿浩 (1962年)

画面手前に描かれた街に、見覚えがないでしょうか。そう、桐生の街なのです。横切る川は渡良瀬川で、画面中央にまっすぐ伸びている道は、本町通りです。本町通りをたどっていくと、その先は北海道まで見渡すことができず。こうした目線で見てみると、東日本大震災で甚大な被害を受けた東北地方も、桐生と地続きであり、そう遠くないことを実感します。震災後、被災地を訪れた経験を基に社会的メッセージをもつ作品を発表し続ける金原寿浩は、本作を通して、震災は決して人ごとで

大川美術館企画展から

〈名画の扉〉

はないということをおわれに示しているのかもしれない。金原は、東京都に生まれ、25年前に桐生に移住。友人たちと共に「東七丁目工房」を開設。2007年には作家仲間と織物工場跡に「工房・金田丸岡平」を開設し、現在も工房を拠点として創作活動を展開しています。

(池田)

※企画展「桐生のアーティスト2020」は3月22日まで。出品作家は、石原彰一、金原寿浩、小林達也、小松原洋生、丸尾康弘、圓山和幸、森村均、山口晃。月曜休館。